

優秀賞（愛媛県連こども人権委員会委員長賞）

「見えない段差をこえて」

東温市立重信中学校 1年 石川花音

あなたは「障がいがある人」と聞いて、どんなことを思い浮かべるだろうか。自分には関係ない、少し遠い存在。そんなふうを感じる人もいるかもしれない。でも、ある日突然、自分の周りの誰かが障がいと共に生きることになったとしたら？きっと、その時に初めて、「どう接すればいいんだろう」と考え始めるのではないだろうか。

私には、軽度の障がいをもつ弟がいる。そのことが分かったのは、弟が小学校一年生の時だった。教室では、みんなと一緒に授業を受けているのに、なかなか内容が覚えられなかったり、音読が上手にできなかったりしていた。先生や家族の勧めで検査を受けた結果、「学習面で支援が必要な状態にある」と伝えられた。最初、私はどう接すればいいのか、何に気を付けたらいいのか分からず戸惑っていた。でも、一番困っていたのは、弟自身だった。後から聞いた話では、「文字を上手に書けなくて先生に怒られた」、「簡単な計算ができなくて友だちに笑われた」そんなこともあったと聞いた。私は、胸がぎゅっと締

めつけられるような気持ちになった。

でも、弟のような子どもたちは、何か特別なことを求めているわけではない。きっと、「分かってほしい」、「少し待ってほしい」、「見守ってほしい」それだけなのだと思う。できないことばかりに目を向けるのではなく、できること、がんばっていることに目を向けてほしい。弟の姿を見て、私自身、そう思うようになった。最近では、弟が宿題で分からないところがあると「勉強教えて」と私に声をかけてくるようになった。最初のころは少し恥ずかしかったけれど、今ではそれがなんだか嬉しく感じている。弟が「そういうことか!」と笑った時、ほんの少しでも弟の力になれたのだと感じる。

もう一つ、私にとって大きな気付きとなった経験がある。小学生の時、脚をケガして、しばらく車いす生活をしたときのことだ。数週間のことだったけれど、日常の中に、こんなに多くの「段差」があることに初めて気がついた。階段やわずかな段差で進めなくなったり、病院では、トイレやエレベーターの場所が分からず困ったりした。周囲の人に助けてもらうことも多く、申し訳なさや悔しさを感じた。けれど、その経験があったからこそ、私は今、車いすを使っている人を見かけたら、自然に道をあけよう、声をかけようと思うようになった。

自分の中に「気付こうとする心」が育ったのだと思う。もし、この体験がなければ、不便さにも、人の優しさにも、気付かずに過ごしていたかもしれない。

私は、障がいのある人を「かわいそう」と思ったり、「助ける対象」としてだけ見たりするのではなく、「ちがいがある一人の仲間」として見るのが大切だと思う。人にはそれぞれ得意・不得意がある。勉強が得意な人もいれば、運動が得意な人もいる。話すのが苦手な人もいれば、聞くのが上手な人もいる。障がいのある人も、同じように、ただ「ちがい」があるだけなのだ。

私は、弟のことも「特別の存在」ではなく、「一緒に生きていく家族」として、自然に接していきたい。もし弟が学校で困ったことや辛いことがあれば、「話を聞くよ」「一緒に考えよう」と声をかけたい。弟が自分らしく生きていけるように、私はそばで支えていきたいと思う。

あなたが、もし障がいのある人と出会うことがあったら、その人の「できないこと」ではなく、「がんばっていること」や「その人らしさ」に目を向けてほしい。特別なことはいらない。声をかける、少し待ってあげる、笑顔で接する。それだけでも、きっと相手の心は軽

くと思う。

私たちが普段生きている社会には、目に見える段差だけでなく、気付きにくい「心の段差」がたくさんある。それは、ちがいを受け入れられない心だったり、知らないことで生まれる不安だったりするのかもしれない。でも、そうした段差も、「知ること」、「寄り添うこと」で、少しずつなだらかにしていけると思う。障がいがあるからといって、怒られたり、笑われたり、仲間はずれにされたりする社会であってはいけない。誰もが安心して、自分らしく生きていけるように。私たち一人ひとりが「理解しようとする心」を持つことが大切だと思う。

この社会には、まだまだたくさんの「見えない段差」がある。けれど、それを見ようとする目と、気付こうとする心があれば、きっと社会は少しずつ優しくなっていく。私はその一歩を、自分からふみ出していきたい。